

### 3/3 連続公開セミナー第3回 「後方支援基地と南海トラフ巨大地震 ～広域被災地への対応探る」

関西学院大学災害復興制度研究所と日本災害復興学会「被災の教訓を未来に伝える研究会」は、未来災害に向け、東日本大震災や阪神・淡路大震災の教訓を学び、減災や被災者支援に役立てようと、「KG復興研 & JSDRR未来研 連続公開セミナー」を昨春より開催しています。

南海トラフ巨大地震の広範な被災地に支援部隊や救援物資を振り分ける後方支援基地の整備が急務となっています。被災沿岸部では火葬が追いつかない遺体を引き受け、家を失った避難者たちには一時的な住まいを提供するなど、後方拠点に期待される役割は数えきれません。

第3回は「後方支援基地と南海トラフ巨大地震～広域被災地への対応探る」をテーマに、東日本大震災で後方支援拠点として注目された岩手県遠野市の本田敏秋市長をゲストに迎え、後方支援をめざして様々な取り組みを始めている岡山県の事例を中心に南海トラフ巨大地震の後背地が担うべき課題を探ります。

■日時: 3月3日(土) 13時00分～17時30分

■場所: 関西学院大学図書館ホール(西宮上ヶ原キャンパス)

■対象: 一般参加可、無料、事前申込要

■プログラム:

●基調講演 本田敏秋・岩手県遠野市長

「3.11東日本大震災遠野市の沿岸被災地後方支援～縁が結ぶ復興への絆～」

●報告

・阪本真由美・兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科准教授  
「歴史にみる南海トラフ巨大地震による被害概要と防災対策」

・大西彰・AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム合同対策本部  
本部長

「AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム」

・大塚愛・岡山県議会議員

「南海トラフ巨大地震と広域避難～岡山県が担う役割」

・村井雅清・被災地NGO協働センター顧問

「ボランティアによる大規模・広域災害に対応する支援について  
～東日本大震災の事例から学ぶ～」

●パネル討論・質疑

司会 山中茂樹・関西学院大学災害復興制度研究所顧問/日本災害復興学会特別顧問

■申し込み・問い合わせ: 関西学院大学 災害復興制度研究所

TEL: 0798-54-6996 FAX: 0798-54-6997

Email: [kgu\\_fukko2005@fukkou.net](mailto:kgu_fukko2005@fukkou.net)

### 生きづらさを感じる子どもたちに夢を 世界一周や不登校の経験を生かして支援

中村建二郎さん(経済学部4年生)は、世界各国の日本とは異なる教育やそれぞれの国の「当たり前」を確かめようと、2016年4月から約1年間、東南アジアやアフリカの34カ国の教育機関を巡る世界一周に挑戦しました。帰国後は、不登校の児童やその親を支援する学生団体「みらいウィズ」(<http://miraiwith.strikingly.com/>)を設立。支援が必要な子どもやその親の相談を受けたり、ワークショップやキャンプなどを開催しています。

中村さんは、小学2年生から中学3年生まで不登校でした。自分を変えなければと、猛勉強し、定時制高校を経て、関西学院大学に進学。勉強や研究、クラブ活動など様々なこと



↑マラウイで能楽を披露する

に挑戦しました。「高校時代はいろいろな理由で周囲に溶け込めない人が多く、心が楽になった。けど、大学では『こうあるべき』という日本の当たり前を感じ、少し生きづらさを感じた」といいます。そこで、各国の現実を自分の目で見ようと、日本を飛び出しました。

アフリカのマラウイでは、1クラス約260人の大規模な小学校を訪問。高校時代に習った能楽を披露すると、子どもたちがお礼にマラウイのダンスを踊ってくれました。「学校は青空教室ばかりで、子どもの服装もボロボロ。けど、みんな表情が豊かで、貧しくても活力を感じた」と振り返ります。

一方、パレスチナで出会った子どもには、笑顔がなく、「にらみつけられることも多く、自分の子ども時代の写真と表情が似ていた」。そこで、まずは日本での生きづらさを感じている人に何かしたいと、国内で自分と同じ境遇の子どもの支援を考えるようになりました。

学生団体「みらいウィズ」では、他大学の学生6人と活動しています。不登校の児童への訪問支援では「ぼくも不登校だった。けど世



↑マラウイでの記念撮影(中央が本人)

界に出て、こんなすごい経験や人々と出会ったんだ」と経験を話しています。「不登校でも夢や希望が持てるように、自分なりに関わっていききたい」と意気込んでいます。